

〔自伝小説〕

わが道を求めて (第七回)

人間をはぐくんでくれるもの

長崎 明

さしえ 竹内秀明

山形の長男一家への手紙

早いもので、もう秋風の吹く頃になったが、一同お変わりないものと思います。春の帰省以来の音沙汰なしで、どうしているかと按じています。

この八月に仙台郊外の農村調査の機会があったのですが、農村は今年 of 作柄を心配していました。過日の農水省統計事務局の発表でも、東北六県平均して八五パーセント、とりわけ宮城県は七五パーセントの作況

とのこと、これを挺子ていこにしてコマの輸入自由化が強行されないよう、警戒しなければと思っています。

亀田得治さんの本

先日、「新潟の教育情報（第一九号）」と亀田得治さんの「拝啓、土井たか子殿」を送りました。おばあさんが孫達にバーゲンで買った夏物衣料か何かを送るというので、宅急便に便乗させて貰ったのです。「教育情報」の例の自伝小説では、お前達が春休みで帰省した時の雑談を材料にしてみました。フィクションとノン・フィクションとが混ぜこぜになった小説ですから、当たり障りがあったら容赦願います。「特集・学力を高める教育実践とは」は、中学校の理科教師をしている郁夫には、多分いくらか役に立つはずですが。「教育情報」は、最近、町の書店でも売れるようになって喜んでいきます。

亀田得治さんの「拝啓、土井たか子殿……革新の心を洗う」という本は、今年五月一日に第一刷、五月二十五日に第二刷と急ピッチで売れ行きを伸ばしており、多くの識者の関心を呼んでいるようです。早速、私も読んでみました。

表紙の感じがとてもシンプルで、とっつきやすいのが気に入りました。時の人ともいうべき現職の社会党委員長に対して、かつて同党中央執行委員、大阪府本部委員長、参議院議員をつとめた人が、「革新の本筋に戻ってほしい」と訴える公開の手紙ですから、何か、こう四角張ったものを想像したのですが、表紙にみられるだけでなく、内容的にもたいへん読み易く、それでいて真情あふれる力作です。ついつい一晩で読んでしまいました。裏表紙に、さりげなく刷られた次の文章が印象的でした。

歴史の経験によれば

しばしば 少数意見にこそ

真理と正義がふくまれている。

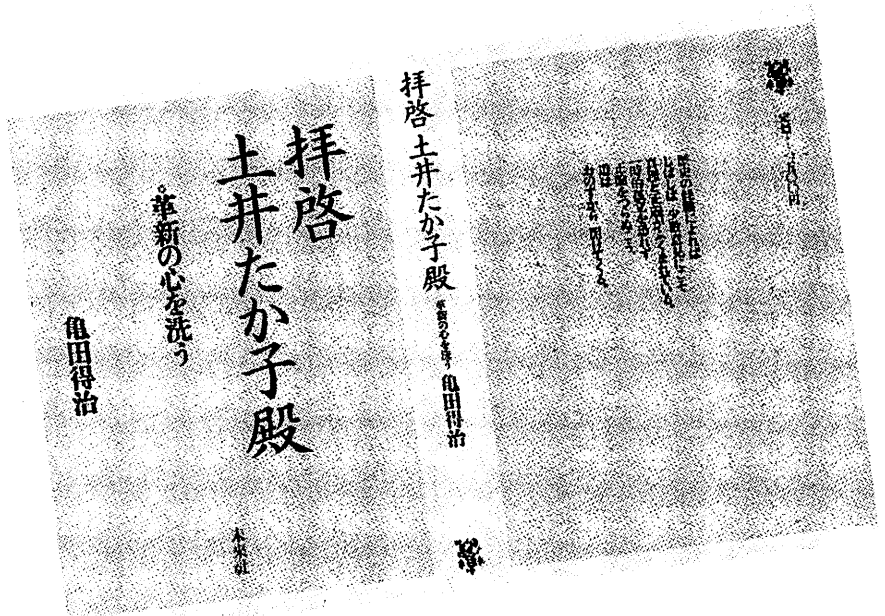
一時的孤立を恐れず

正論をつらぬこう。

道は

おのずから 開けてくる。

亀田さんの本は、第一部が土井たか子社会党委員長への公開書簡で、その一、「社会合意」路線に未来はない、その二、自ら謙虚に歴史の鏡にうつして、となっており、第二部が私自身の歩み、となっていて、戦前、戦中、戦後を通して、敬虔なキリスト者として、



また社会運動家としての自らの来し方を、たんたんと述べています。亀田さんの本、とりわけ、この第二部を読んだら、私の自伝小説なぞ筆の遊びみたいなもので、恥ずかしくなってしまうました。本当のところ、筆を折りたくらいです。

賀川豊彦に心酔していた亀田さんが、一九三五年（昭和十年）春、東大卒業と同時に三輪寿壮さんの法律事務所に入り、長岡市近くの枋尾の山の中で、初めて労農弁護士団の一員に加わるあたり、緊張の中にも思わずほおの緩む箇所があります。少し引用してみます。

三輪さんが「きみ、まだ弁護士会の登録はやってらんが、（司法）試験は合格したんだから、弁護士のような顔して行ってくれ」という。

「そんな……先生、無茶ですよ」

しりごみする私に構わず三輪さんは「学生服というわけにもいかんから、これを着ていけ」と背広を貸してくれた。

現地入りしたものの、言葉が訛なまりがつよくてまるで通じない（中略）。

それよりも、いちばん困ったのはネクタイだった。あの奇妙な布切れは、一度ほどくと、どうしても結

べなくてお手あげになるのであった。こうして亀田さんが新潟で活躍を始めたことは、この本を読むまで知らなかった。時あたかも美農部達吉の「天皇機関説」が告発され、二年後には蘆溝橋事件が起こる直前だった。

亀田さんは今年七十六歳。

私の愛読書は、「聖書」である。「聖書」と「共産党宣言」は、いつも手の届くところにある。それは私の原点である。

そして、今もかくしゃくとして、全国革新懇や非核の政府を求める会のリーダーとして東奔西走しておられる。

今年一二月に、新潟県の革新懇が亀田得治さんを招いて、長岡市で大講演会を企画しているとのこと、大成功を願っています。

ところで、ぼくがこれほどまでに長々と亀田さんの本を紹介し、お前達にも読んで貰いたいと思っているのは、実はぼく自身の思い出ともかかわりがあるからです。

それは、一九五〇年（昭和二十五年）秋のこと。当時ぼくは日本販売農業協同組合連合会（略称「日販連」、東京都）に勤めていた。この日販連は、今でいう産直

のようなことをやっていて、鶏卵の買付けに新潟県東頸城郡の松之山という村の山奥を訪ねたのだが、その時泊めて貰った所が農民組合の活動家の家で、ヨレヨレのわらぶとんに汗臭い毛布にくるまって寝たら、夜中にノミやら南豆虫やらに喰われて、眠るどころではなかった。

亀田さんの本に、農民運動してる農家に泊まって、同じようにノミに苦しめられた話が載っていて、とても嬉しくなりました。今はもう松之山のどの辺か、何という人の家かも忘れてしまったけど、四〇年近くも昔の思い出にひたることができました。

とにかく一度読んでみてください。

孫娘（あゆみ）と立山に登る

今年の夏は、お前も中学校の行事が忙しくて、とうとう新潟に帰って来れなくて残念でした。夏休みというと、世間の人は、学校の先生は休暇がとれて良いですね、というが、それは昔のこと。事実、ぼく達の子どもの頃、台湾で公学校の教師をしていたおやじ（村松の大おじいちゃん）は、毎年のように、台湾の東北太平洋に面した澳底オキダイの海岸に、一週間ほどのキャンプ

に連れて行ってくれたものでした。

そんな昔の、それも台湾の話を持ち出すまでもなく、十年くらい前までは、学校の先生は夏休みを多少はエンジョイできたでしょう。でも今は、クラブ活動の指導やら、入試準備の補習やら、家庭訪問やら、はては自分自身も研修に引っ張り出されるなど、予定が目白押しで、とても休みの気分さえないのが実情だとか。

東京都立保育園に務めている康子（長女）は、どうやら休みがとれて、あゆみ（孫）を連れて、お盆前後の十日間ほど泊まってくることができました。

ちょうど大学の研究室の学生達が立山に登ろうというので、我われ一家も同道したのですが、小学校三年のあゆみには少し無理なコースかと思われました。私の研究室には今年はじめて女子学生が二人入ってきたので、あゆみは終始「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と付きまといまいました。一人娘のあゆみには余程頼もしかったのでしよう。

室堂から一ノ越山荘を経て雪溪にかかる頃、うしろから随って行ったボクをふりむいて、突然、何を思ったか、「おじいちゃんはおんとにお姉ちゃん達の先生なの」と聞くので、こっちがびっくり、ヘドモドしてしまいました。「うん、そうだよ。だって、おじいち

ゃんは大学の先生で、お姉ちゃん達は大学の学生なんだもの」と答えるのがやっとでした。あゆみからみれば、この頼もしいお姉ちゃん達こそ、大学の先生だと信じて疑わなかったのに、おじいちゃんがそのまた先生だというのが、どうにも納得できなかったらしい。

「どうして、おじいちゃんは大学の先生なの」と何度も聞き返し、半信半疑の態ていでした。フウフウいながら、雪溪やらガレ場やらを登っている最中に、こういう会話が出来るのが面白い。逆に子どもって何を考えているのだろうと思ったものです。何と云って立山は三千メートル級の山ですから、少しは空気も薄くなったでしょう。こっちも一足一足フウフウ登りながら、「そういわれれば、おれはなんで大学の先生なんだらう。公学校の先生をやっていたおやじが、毎晩遅く帰って来て、生徒達のテスト（それも自分でガリ版を切った）の採点をやっていたのを見ていて、先生にだけはなるまいと思っただけなの、このおれだったのに……。だが、待てよ。なんで先生になったのかっていうことと、なんで先生なのかっていうことは、質問の意味が違ふのかな」なんて考え考え登ったっけ。「子どもと話すのって、なかなか難しいもんだ」と今さら思い知らされたっけ。「大人を相手にしている大

学の先生よりも、子どもを相手にしている小学校の先生や、幼稚園・保育園の先生の方が、教えるという点ではたいへんな仕事をしているのだな」なんてことも、実感させられた次第でした。そういう子ども達の世話を毎日毎日受け持っているお母さんもご苦労様です。

人間としての成長過程にある子どもを、客観的に見つめながらも、子どもの気持ちになって話し合うことの難しさ。父親としても、おじいちゃんとしても、そして大学の先生（教育者）としても、ぼくは失格ということになりそうです。

半信半疑と自由奔放

今年の春休み、子どもと孫と一同揃ったのに気を良くして、久しぶりにアルコールが進んで、とうとう五年前、台北放送局から童謡を放送した話にまで及んだことがあったわけ。ところが、家族一同、このおじいちゃんのいうことに半信半疑だったようだ。

あの翌朝、少し寝呆して、広くもない庭をぶらぶらしていると、孫たちが起きてきて、「おじいちゃん、あの話、ほんとなの」と、まだ疑っている。

そういうえば、お前達も知ってのとおり、このぼくが

家で歌を口ずさむことは、ほとんどなかった。子どもも、孫も、おばあちゃんさえも聞いたことがなかった。だから、「ウッソー」といわれても仕方がなかったんだが……。でもね、研究室で学生相手のコンパの時には、調子が良いとちよくちよく唄ったことがあった。「おじいちゃんね、うちでは唄わないけど、学校では唄ってるんだよ」

「じゃあ、やっぱり、サヨ・オーナラって歌唄うの」「いやあ、まいった、まいった」

そういう時は勿論童謡ではなくて、東北地方の民謡を唄うことが多い。もっとも、三つ四つくらいしか知らないが……。それは、大学教師になる前、土建会社に務めていたとき、秋田県の羽後本荘の片田舎で仕事をしていたことがあるのと、その後、岩手大学に約十年いたので、何となく東北の民謡に親しむ機会があったからである。

お前達が山形で暮らすようになったのも、物覚えのつく頃に育った東北への憧憬みたいなものが、あったからではないのかな。

それはともかく、おれも還暦に近づいた頃、自分で音程が狂ってきたことに気付いて、学校でも唄うのをぶっつりとやめてしまった。「歌を忘れたカナリヤ」

ではないが、こればかりは、「象牙の舟に銀の權、月夜の海に浮かべれば」思ひ出すわけにいかない。

「ネ、ネ、今晚もサ、お酒飲んでサ、聞かせてくれたって、いいじゃんか」

「イヤー、それはどうも」

「おじいちゃん、恥ずかしいの」と、かたなしである。

うちの孫たちは、誠に屈託がない。信ずることも、疑うことも、直観的に嗅ぎ分けながら、自由奔放に、しゃべり、うたい、泣き、笑い、ふるまっている。

試みに国語辞典を引いたら、「奔放」とは「世間の慣行・常識などにとらわれず、思った通りにふるまう様子」とあった。

ほら、去年の夏のこと、こんなこともあったっけ。お前達自身のことだから、多少覚えてるだろうけど。海水浴から帰って来た四人の孫たち、うちの庭で素っ裸で水道の水を掛け合い、キャーキャーじゃれ合っていたっけ。いくら小学生とはいえ、また、うちの庭がいくらか庭木に囲まれていて、人目につきにくいとはいえ、女の子なら少しは恥じらいがあっても良さそうなるものを、ちっとも頓着しない。

もっとも、「女の子のくせに」という言い方をして

はいけないのだろう。十歳そこそこの女の子には「大事なところを隠せ」と教えながら、男の子がおチンチンを隠し隠し、水浴していたら、それこそ見ちゃおれない。「なに恥ずかしがってる」ということになるのは、おかしいのだろうか。

今のお父さん、お母さんたち（郁夫・道子・康子）は、我が子のそうしたふるまいを、にこにこ見ているだけだったね。

そこで、ぼくがカメラを持ち出して、「みんな、こっち向いて」といったら、さすがに「だめっ!!」とばかり、ホースの水をぶっかけられた。

康子お母さんが「やめなさいよ」といったけど、それは、おじいちゃんに水を掛けるのをやめなさいという意味で、裸ではしゃぎまわってるのをやめなさい、というわけではなかったようだね。

そういえば、我が長崎家は代々、子どもを自由奔放に育てるのが、むしろ家風だったとさえいえるのかも知れない。それは恐らく信吉おじいさんの代から始まったに違いない。

家族の一員としてのルール、たとえば子どもといえども、一人一人が家事を分担して、玄関を掃いたり、縁側を拭いたり、庭木に水をやったり、靴をみがいた

り、下駄を揃えたり、といった調子。だけど、あんまり「勉強しろ、勉強しろ」といわれた覚えがない。

兄弟どうし、友達どうしのふれあいに、親が口をさしはさむことは、めったになかった。木登りをして、木の枝を折ろうが、すべり落ちてヒザをすりむこうが、「危ないから、やめなさい」といわれたことがなかった。勿論、けがの手当はちゃんとしてくれたのだが……。

だから、ぼくたちも、自分の子どもを育てるのに、そうしてきたし、お前たちもまた、そのように子育てをしているのだろう。

だから、孫たちは、親や、またその親を遊び相手と心得ているらしいね。

「おじいちゃんて、ほんとに大学の先生なの」とか、「おじいちゃん、歌唄わないのは恥ずかしいからなの」などと、ぬかしおる。

「指示待ち」の子ども達

半信半疑、つまり頭の中では信じたり疑ったりしながらも、自分の行動としては自由奔放というのが、子ども達としては真実なのかも知れないね。

ところが、大人の社会が、自ら信じ、自ら疑い、自

ら行動する子どもを、鑄型にはめこむことをもって、「教育」と心得る最近の風潮が、子どもをいじけさせているのではないか。

去る九月一八日、新潟市女性大会というのがあって、その「子どもの未来と平和」分科会の助言者に請われて参加した。

この大会は、国際婦人年を契機に発足したというのに、女性大会と称している。

聞いて見たら、婦人の「婦」は「よめ」の意で、婦人とは「社会の中でなんらかの役割を負っているもの」として捉えられた女の人のことだ。「女性」よりも範囲が限定され、古い語感を与えるということによるのだそうです。

この世の中は、女性と男性により成り立っているから、単に女性大会といえば、男性でない人全てが参加資格者ということになる。その中に黒一点、私が招かれたのは光栄の至りでした。

それはともかくとして、その話合いの中で、ある私立高校の英語の先生が「今の子どもは指示待ちだ」という話をしたところ、その「指示待ち」をめぐる、座が随分と盛り上がって来ました。

(ながさき あきら)にいがた県民教育研究所会長